
ネガイゴト一つ

そらと平安

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガイゴト一つ

【Nコード】

N0066G

【作者名】

そらと平安

【あらすじ】

異世界召喚ファンタジー。王道っぽいけど主人公はネガティブ思考。崖から落ちたはずなのに目が覚めたら森の中。元の世界にもどりたいとはあまり思わないけれど結局願いを叶えるための旅に出ることに。人を、信じてみませんか——只今練り直しにつき更新ストップしています 申し訳ありません

第1話 ファンタジー（前書き）

一部修正しました。

楽しんで読んでいただければと思います。

第1話 ファントジー

落ちる おちる オチル

なんで私は落ちてるんだろう。

落ちたいの？落ちたくないの？ わからない。

風が私の髪を乱す。風圧に負けてとても目を開けていられない。

ああ 私はこのまま死ぬんだ。

何故か他人事のようにそんなことを思う。

そこで私の意識は途切れた。

- - - - -

なんだかすごく気持ちが良い。

目を閉じていてもわかる、柔らかな草の感触。暖かい日の光。

ここが天国なのかな。

そして目を開ければ青い空、白い雲、そして空を飛ぶ大きな大きな

竜。

「え？」

天国って竜までいたっけ…？

飛び起きて辺りを見回す。自然溢れる普通の森だ。

竜が飛んでいることをのぞけば誰もが1度は見たことのあるような。

とりあえず自分の体を見るが外傷は…なし。

そもそも私は生きてるのか死んでいるのか。それすらよくわからない。

どこも痛くはないし、足もついている。

でもあれだけ高い崖から落ちたんだから無事なはずはない。

確かに私はあそこから落ちたのに。

考えても考えてもわからなくて、混乱するばかりだ。

「あ、目が覚めた？」

突然後ろから声がしたので振り返ってみると、真後ろに美しい金髪の少女が立っていた。

大きな瞳はまっすぐ私に向けられている。

どうやら私に言っているらしい。

「……は、い……」

その少女は十代の後半から二十代の前半くらいだろうか。日の光に照らされてきらきら光る金髪が、白い肌によく映えている。

瞳の色は淡い緑色。若葉の色だ。日本人じゃないよね、明らかに。そしてよく見ると、なんと耳がとがっている。

ここが天国なのだとしたらまあそれくらいのことでは驚くべきではないだろう。

これがいわゆる天使というやつなのだろうか。でも羽は生えてないし頭の上に輪っかもない。

そんなことをごちゃごちゃ考えていると、その天使似のお姉さん

は黙っている私を気遣ってか

「やっぱりまだ具合が悪い？」

なんて心配そうな顔で言ってくれる。

その透き通る綺麗さが眩しくて、そして私の人見知りが今更出てきて、ついつい俯いてしまった。なんて恥ずかしいんだ。

そもそも私は初対面の人となんてまず話せないのだ。ずっと友達が少ないのも多分そのせい。

その上このよくわからない場所にいて、相手は人かどうかもよくわからないお姉さん。

「あ……大丈夫……です。ありがとうございます」

「そう？ でもあんまり無理はしない方が良いでしょう」

ん？ いや死んでるとしたら大丈夫も何もないような気がするんだけど。

でもそんなことを言っている場合ではない。

とりあえずこのお姉さんに状況を説明して貰わなければ、という結論に達した。

人見知りのくせにえらいぞ自分、なんて自賛してみる。

「あの、ここは……どこなんでしょうか」

なんとか声を絞り出す。

「あ、そうだよね。いきなりこんなとこに来ちゃったんだから、びつくりしてるよね」

落ち着いて聞いてね、と言ってお姉さんは姿勢を正した。つられて私も背筋を伸ばす。

「ここはね、あなたからするといわゆる異世界、ってやつなの。あなたの世界とは別の次元にあるわ。」

確かにあるけど、決して交わることのない異世界」

「異世界……」

まるでどこぞのおとぎ話だ。驚きを通り越して啞然とする。

私は元気で聡明な主人公にはとうていなり得ない自信があるのだが。

そんな私がどうして異世界に来たんだろうか。

ぼかん、と口を開けている私を見つめて、お姉さんは続けた。

「そう、異世界。そしてまず、あなたには謝らなきゃいけないの」

お姉さんの若葉色の瞳がわずかに伏せられて、本当に申し訳なさそうな顔をする。

それすらも見とれてしまうほど綺麗だ。

「ムツキっていう、多分今相当絞られてると思うんだけどね、その人が、あなたを召喚してしまったのよ」

召喚、ですと。私は召喚獣か何かですか。いや、そもそもこの世界にそんなものがいるのかはわからないが。

少なくともここには魔法みたいなものが存在するらしい。

どんどんファンタジーになってきたぞこれ。

何度も言うが私は物語の主人公になれるような明るい性格の持ち主ではないし、柄じゃない。

というか今更だけどこんなこと本当にあり得るのだろうか。

夢を見て居るんじゃないかとさえ思えてきた。

だけど——…… やっぱり夢にしてはあまりにリアルすぎる。

「召喚……っていうのは……？そもそも何で私なんかを召喚するんですか？ 何のメリットもないですよね」

私を召喚するなんて愚かなことは、まあ確実に事故で起こったものだろう。

自分を嘲笑する気持ちで、ついつい言葉が荒くなる。

お姉さんは気にする様子もなく、だけど突然何故か悲しそうな顔になって言った。

「あなた、死のうとしたの？」

「え？」

それは答えになっていない。だけどそうじゃなくて、

——何で？

どうしてそれを知っているの？

私は”事故”で崖から落ちたはずだよ。

「ど うして……？」

掠れて声にならない小さな問いを口に出した。

私はもう一言も発せない。

目の前のお姉さんが、天使から悪魔に変わって見えた。

第1話 ファンタジー（後書き）

昔からなんとなく考えていたものを形にしようと思いましたが書き始めました。

異世界に飛ばされたこの子はどうなるんでしょうか。
名前すらまだ出していませんが次回には出すつもりです。

第2話 意味（前書き）

突然異世界へ飛ばされた玲。

天使のようなお姉さんに状況を説明してもらっていたけど・・・

第2話 意味

あのときの光景がよみがえってきて、私は固まった。なんでこのお姉さんはこんなことを言うのだろう。

「もし違うのならごめんなさいね。気にしないで。それに説明を強いるつもりもないから」

私は黙って俯いていることしかできない。

するとお姉さんは私に話す気がないとわかったらしく、話を続けた。

今この話を流してくれるのならそれでいい。

「私がさっき言った人、ムツキはね。自分でコントロールできないほどの魔力を持っているの。」

そしてたまに、本当にたまにだけど、何かに操られるみたいに魔法を使うときがある。

多分あの人の強すぎる魔力がそうさせているんだけど……。

いつも大きな事は起こさない。だけど、ただ確実に意味を持った行動を起こすの。この意味、なんとなくわかるかしら？」

こくり、と頷く。

「あなたは今ここにいるのは、その魔力の意志によるものよ。きつと意味があつてここに來たはずだと、私は思うの。今回はちょっと、事が大きすぎたけどね」

意味――

生きる意味さえ見失ってしまった私に一体何の意味があるっていうんだろっ。

「そうですか……」

そんな曖昧な返事しか出てこない。

「まあ今の状況はこんなところかしら。
とりあえず、私は貴方の名前が聞きたいわ。私はフォレスト。エルフです」

そうかこのお姉さんはエルフだったのか。
そう言われれば確かに昔読んでもらった絵本で見たエルフによく似ている。

あの頃はなんて幸せだったんだろう。

「私は……玲、と言います」

なんとなく佐藤という名字は言わないでおいた。ここでは意味を持ちそうにないから。

「これからよろしくねレイ。ようこそシエラへ」

この世界は、シエラというのか。

「はい……。よろしく願……」

そこであれ？ と違和感を覚える。

“これからよろしく”？

今お姉さん——フォレストは確かにこう言った。

「私は、元の世界には……」

「次元の狭間に落とされたくないのなら、今は帰れないわ」

「そうですか……」

ああ、私はついにおとぎ話の住人になってしまったわけね。
でもやっぱり実感あまり湧かない。まあいいか、なんて思っ
てしまう。

それはきっと、私が自分の生を捨ててしまっているからだ。

お姉さんは何か知りたいことはないかと聞いてくれたが、いえ、とだけ答えた。

知りたいことがない訳じゃない。わからないことはありすぎる位だけど、今はそんな気分じゃない。

「そういえば、他の人もいるんですよね……？　その人達は？」

「多分その内帰ってくるわ」

フォレスタはにこりと笑った。やっぱりこの人はすごく可愛い。悪意などみじんも感じさせないし、好意的なオーラを全身から放っている。

だけど本当に信用できる人なのか、判断するにはまだ早すぎる。

- - - + - + - + - + - - - -

この子には一体何があったんだろう。

気にはなるが、会ったばかりの私が土足で踏み込んで良いことではない。

それにさっきからずっと無表情で、ほとんど表情の変化を見せない。

初めはいきなり異世界に飛ばされた驚きで放心しているのかと思っただが、どうやらそれも違うみたいだ。

まるで感情を忘れてしまった人形だ——……

死のうとしたのか、なんて直接的に聞き過ぎてしまったと思う。

言ってから気付いた。

そのときは一瞬動揺していたけど、それだけだ。

それにまずはこの子の信用を得なければ。

さあどうするか。

あの子は、さっきからずっと空を見上げて何か考えている。

何か声を掛けようとしたその時、

「ただいまー」「ただいま戻りました」「……」

やっと帰ってきた。

やっぱり、レイは無表情のままだったけれど。

第2話 意味（後書き）

二人の名前を出しました！。

後ろ向き主人公佐藤玲と、エルフのフォレストです。

あと、1話に引き続き前半までは玲視点、後半からはフォレスト視線で書きました。

第3話 銀 藍 緑

急に三人も人が現れたことで、私は内心驚いていた。

一人は三つ編みにした銀髪に猫のような金色の瞳をした、若くもそうでないようにも見える妖艶な女の人。

服は上から下まで真っ黒で、胸元が大きく開いているし、長いスカートには大きくスリットく入っている。

同じ女性である玲でさえも見とれてしまうような色っぽさだ。

もう一人は髪も瞳も澄んだ藍色で、長髪がとてもよく似合った男の人。

顔は女の子よりも綺麗で、羨ましいと思うのさえも申し訳なく感じるほど。

そして髪が緑色で瞳は女の人と同じ金色の男の人。

目つきが悪いというか、隙のない感じがして少し怖い。威圧的にも見える。

その人の額には、何故か赤く腫れているところがあって、痛そうだ。

きつとこの中に”ムツキ”という人がいるに違いない。

「おかえりなさい」

そして、フォレスタが言葉を続けるより先に藍色の人が最初に私に気付き、

「初めまして。俺はカイラ」カバリエと言います。

体はもう何ともありませんか？」

まるで人形のように綺麗な人に笑顔でそんなことを言われたら、

落ち着いて受け答えなどできるはずもなく、玲はこくこくと頷くことしかできなかった。

「こっちはムクモ」ストリージ、こっちの緑はムツキ」ストリージと言います」

女の人と緑色の人を順に示して教えてくれた。

ムクモという人はにこりと笑顔を向けてくれたが、ムツキ——例の魔法使いムツキ、は相変わらず無表情のままだ。

だがカイラの口から”緑”という言葉が出たとき、片眉がぴくりと動いたのがわかった。

普段人の目ばかり気にしていると、こんなことにまで気が付いてしまう。

「えと…玲、です」

なんとか自分の名前を告げる。

そしてさつきからずっと感じていた視線の方をおそろおそろ向いてみると

ばつの悪そうな金色の瞳がこちらを見ている。

機嫌の悪そうなその表情とは裏腹に、目には申し訳なさが浮かんでいた。

「…悪かったな」

「へ…？ あっ、いえ……」

主語も何もなくいきなり言われて理解するのに少し時間がかかったが、異世界に引き込んでしまったことだろう。

「・・・」

何か答えるのかと思いきやそのまま何も言わず、ぷいっと後ろを向いて歩いていこうとし――

「つぐ」

捕まった。

ムクモがムツキの襟を掴み、思いつき引つ張ったのだ。

「ごめんなさいねえ。悪気はないのよ、悪気は」

そう言つてムツキを引き倒すようにして座らせ、自分も私の隣に腰を下ろした。

そしてムツキ達とは反対側の玲の隣にカイラが座り、輪になった形だ。

それからムクモがこの先どうするかを玲に話し始めた。そしてこの世界のことも少し。

だけど頭にはほとんど入って来ず、素通りに近い状態だった。

よく知らない言葉がたくさん出てくるその話は、学校でわからない授業を受けているように感じた。

その感覚は嫌なことを思い出させてますます話が理解できなかった。

「…と、こんな感じなんだけど」

言い終わったムクモが玲を見た。

だがレイは曖昧に頷くだけで、多分よくわかっていないのだろう。レイ状況を考えればそれは至極当然な事でもあるが、これをわかってもらえないとこの先困ることになる。どうすれば良いか、答えは簡単だ。

「ちょっと失礼します」

そう言っ て自分とレイの額を合わせる。

表情はほとんど変わらないが合わせた額から動揺が伝わってきた。女性にいきなりこんなことをするのは気が引けるのだが、致し方ない。

やわらかな白い光が生まれる。

そして光が消えたところでそっ　と額を離れた。

すると驚きで大きく見開いた目が、カイラを見ていた。

「すみません。でも、これで解ってもらえたか…ね？」

「…はい」

魔力とともにレイの頭に流し込んだのは、さつきひとしきりムクモが言った説明だ。

無理矢理頭に叩き込むのはあまり優しいこととはいえないが。

「えと、これは魔法…ですか…？」

驚いたことに、うつむきながらもレイが質問してきた。

この子が自分から言葉を発するのは、これが初めてではないだろうか。

この先のことについての質問ではなく、魔法の方に興味を示したというのがおもしろい。

きつと向こうの世界にはないのだろうな、とカイラは思った。緊張が少しでも解けてくれたのならいいが。

「はい。簡単な魔法ですよ。

でも直接情報を流し込むのはちょっと荒技でしたが…。

大丈夫でしょうか？」

「大丈夫…です…」

まだ何か言いたげだったが、レイはそれしか言わなかった。

P e t i t u n p a s

第3話 銀 藍 緑（後書き）

カラフルな頭の人たちが出てきました。

1話1話が短い目でちょっとずつしか進んでいないので申し訳ないです。

次はやっところさ、何かはわかるはずなので・・・

第4話 哀れみ

魔法、ね。

カイラに流し込まれた、もとい叩き込まれた情報には驚いた。理解できるはずのない内容でも上手く理解できる。あまりの不思議さについて質問してしまったほどだ。

額を合わせられたのには照れたな……。

この世界には魔法があつて、たくさんの種族が居るらしい。人間、獣人、半獣、獣、ドラゴン……。

魔法がも当然のように存在している。まさに異世界だ。ファンタジーの世界。物語でしか知らない世界。

大陸はたった一つ、その中でいくつかの国に分かれている。小さな島国もあるそうだ。

大抵の国は平和だが、国内で紛争の続いている国や、睚み合っている国もいくつかはあるらしい。

だけどそのどこにも属さず、神聖とされる小さな島がある。

確かにある、けどいつどこに現れるかはわからず、本当に“心から”の願いを持つ者の前にのみ現れるという島だ。

そこに行けば何らかの方法で願いが叶う。

あろうことかこの人達はそのなんとも不確かな島を目指している

と言っ。

それだけ強い望みを持っているのか。

私はそれによって元の世界に帰されるはず、らしい。

そしてそれは、私も一緒にその島を目指すことを意味する。

別に何でもいい。

正直なところ一度死のうとしたんだ、元の世界に帰りたいとは思っていない。

向こうの世界はどうなっているんだろうか――

友達らしい友達も居ない私を心配する人なんて、
ただとおばさんには申し訳ないと思っている。唯一私を気に掛けてくれていたのに。

まあどっちにしろ今帰ることはない、考えるだけ無駄なことなのかもしれない。

今、私たちは森の中で野宿…いや、野ではあるが野宿ではないよ
うな…をしている。

というのは、今なんともいえない場所にいるからだ。

ムクモ（この世界には敬称で呼ぶ習慣がないらしい）が言うには、
力の強い魔術師や魔女が使えるものらしいのだが、
魔術で空間を造っているらしい。

その空間の広さに上限はなく、ムクモ達の場合はそれを寝ることに使っているらしい。

これを聞いたとき、あまりの万能さに啞然とした。

そこに荷物も全てしまっているという。それで四人とも何も持っていないかったんだ、とわかった。

そして私と他の四人と言葉が通じるのも、魔法を使っているからだそう。やはり言語は違う。

便利といえば便利だ。

そしてムツキの魔力がすごく強いというのは聞いていたが、この空間を造っているのがムクモということは、彼女も相当力が強いということか。

だけどそんな強い力を持った人たちが一体何を望むというのだろうか。

「……わかんないな……」

「何が？」

え、と思考停止する。

なんとなくつぶやいたつもりの独り言に返事が来たから。

声の主は、すぐ側で寝ていたフォレストだった。

「え……と……、何で旅をしてるのかな……と」

「それは、願いがあるからよ」

迷い無く答えたその言葉には力があつた。
私をまっすぐ見つめる瞳は、強くて、綺麗すぎる。

「自分の力じゃ、叶わない願い。」

レイは、どうしても叶えたい事って無い？」

何かを望む気持ちなんて、もう捨ててしまった。
それに、

「……私は何かを望んでいいような人間じゃないです」

「自分はその価値に値しないっていうこと？」

「はい」

「価値は貴女が決めるものじゃ無いわ」

「……母は私を産まなければ良かったと言ったのに？」

言っただけはつとした。

何で私はこんなことを言ってしまったっているんだ。

意地になってつい言わなくてもいいことを言ってしまった。

それに、きつとこの人も私を哀れに思うんだ。可哀相な子、誰にも愛されない惨めな子。

掛けられる言葉はいつも上辺だけ。哀れみ、同情、己の良心、偽善心を満たすための言葉。

そのはずなのに、

「じゃあ、私が貴女を望むわ」

返ってきたのは、初めて言われた言葉だった。

L
e
p
r
i
m
e
p
a
r
o
l
e
.

第4話 哀れみ（後書き）

Le prime parole . 初めての言葉。

イタリア語です。

第5話 How old are you?

「え……？」

私が言葉の意味を理解するより早く、私はフォレストの腕に包み込まれていた。

「私は、あなたを望む」

もう一度、ゆっくりと、含んできかせるように言った。

気付いたときにはもう遅い。

涙が後から後から流れ出てくる。

「つく……！」

今、フォレストはどんな顔をしているんだろう。呆れられてしまっただろうか。

だけど頭ごと抱き込まれている私に、フォレストの顔は見えない。

ぼん、ぼんと背中を叩いてくれている手が優しくてひどく懐かしい。

泣いてもいいのかな。私は、望みたいと思ってもいいのかな。まるで小さな子供がお母さんにあやしてもらっているように安心する。

こんなに泣いたのはいつぶりだろうか。

堰が切れたように涙が流れ続けると同時に、私はどっと疲れを感じた。

そして、

「……………おやすみなさい」

そう言われてすぐに、激しい眠気に襲われて意識が遠くなった。

「おはよう、レイ」

起こされて目を開ければ、そこにはフォレストが居た。

「あ……………おはよう、ございます……………」

寝起きの顔を見られたことが恥ずかしくて少し俯く。

そして昨夜の事を急に思い出して更に恥ずかしくなった。

「あのっ……………昨日……………は、ごめんなさい」

「なんで謝るのよ。謝るのは私の方」

……………違う。

違うの。私本当はすごく嬉しかったの。初めてそんなこと言われたの。

だけどそれは言葉にならない。
首を左右に振るのが精一杯だ。

するとフォレスタは無言で、だけどとても優しい笑顔を浮かべて私の頭を撫でてくれた。

そして私の手を取った。

「さ、行きましょう。朝ご飯が待ってるわ」

みんなもね、と可愛らしくフォレスタは付け加えた。

「ねえ、そういえばレイは歳いくつなの？」

朝食を食べ終わってから、フォレスタが突然そんなことを聞いてきた。

川沿いの、すこし拓けた場所に五人、それぞれ自由に座っていた時だ。

ムツキとカイラもそういえばそうですね、なんて言って興味を示してきた。

私も実は少し気になっていたところだ。

でもそんな中、何故かムクモだけがすごく嫌そうな顔をしていた。
何故だろうか。

「え？　つと16です」

昨日のことがあったからだろうか、フォレスタに対しては少しまでもに話せるようになった気がする。

「あら、じゃあ一番年下ね」
そう言ってフォレストはふふつと笑った。

「皆さんは……？」

「私は19よ」

と、フォレスト。ああ、やっぱり年上なんだなと思った。

「俺は18です」

これはカイラだ。これには少しだけ驚いた。

2つしか変わらないのにこんなに大人びているのか。こんな年下に敬語を使ってくれている上に、この人はいたって紳士的だ。

「ほらムツキは？」

そうフォレストに言われ渋々といった様子でムツキは言った。

「……18」

「え」

思わず声が漏れてしまった。

まさかこの人がカイラと同じで私より2つも上だとは思わなかったのだ。

「ぶっ」 「ふはっ」

カイラとフォレストは吹き出す次第。

それはやはり本人も気にしていたらしく、ムツキの眉間にはどんなしわが寄っていった。

「……！ すっ……すみません……！！」

「いつ、いいのよ……レイ！ ぶっ」

「そうです、いつもそうですから……くっ」

私はとんだ地雷を踏んでしまったようだ。

二人が爆笑したことでもいいかげんムツキが本気でイライラしてきていたので、二人はそこで笑うのをやめた。

だけどまだ必死に笑いを堪えていた。

そしてムツキの機嫌がすごく悪くなって、ぷいと向こうを向いてしまった。

とりあえずムツキの年齢からは離れた方が良さそうなので、もうそのことには触れないでおこうと思った。

話を逸らすためにも今度はムクモに聞いてみようと思ったが、大人の女性に年齢を聞くのは失礼かと思い止まった。

その話の間中ムクモがずっと負のオーラを放っていたことは気のせいだと思いたい。

何より二度目の地雷を踏むことだけは避けたかった。

第5話 How old are you? (後書き)

1話にいくつもぶちこんで申し訳ない。
とりあえず4人の年齢です。

ムクモが歳を教えたくないのは相当な理由というか、彼女なりに色々あるんです。 笑
そのうち出しますね。

第6話 Dragon

「う……っ」

「大丈夫？ 本当にヤバかったら言ってちょうだい」

「は……い……」

「やっぱり初めはキツイわよねえ……」

横からムクモとフォレストが声を掛けてくれている。
だけど私にはもう答える気力すら無くなっていた。

というのも、今いわゆる“乗り物酔い”をしているからだ。
元々乗り物にはあまり強くないのだが、こんなに酔ったのは初めてだった。

だけどこれは普通の車やバスとは訳が違う。

私たちが今乗っている物……それは、竜だ。

この世界に来て一番最初に見たのも竜だった。
そしてこの世界で竜はけっこういるらしく、人と共存している
そうだ。

人と離れて暮らしているものも居れば、人と共に働いているもの
も居るらしく、こういった運送業をしていたりもする。

私の世界で言う電車やバス、タクシーと同じで一般的な乗り物で
もあるようだ。

大きな竜に鞍のような物が取り付けられてあり、一頭に対し二、三人
が乗れるようになってる。

体を固定する物はなく、自力で掴まっているしかない。高いところ
はさほど苦手でないが、やはり怖い。

竜は大きくもあるし、空を飛んでいて風が気持ち良いのは確かなのだ――が、しかし。

見た目以上に揺れるのだ。

それを取り物に弱い私が耐えられるはずもなく、だけど心配を掛けるわけにもいかず、なんとか我慢するつもりだった。

でもやはり、キツイものがあつたのだ。

初めはなんとか耐えられるかと思つたが気分は悪くなる一方で、今はしがみ付いているので一杯一杯。

他の四人はどうしてあんなに平気そうなのだろうか。

だけどこの先何回も乗ることになるのであれば、なんとか慣れないといけないだろう。

「……レイ、酔つた時はとりあえず深呼吸ですよ」

後ろからカイラが気遣う声を掛けてくれる。

初めて竜に乗る私の安全を考えて、後ろに乗ってくれているのだ。

言われた通り、ゆっくりと深呼吸を繰り返す。

「そう、あと顔も上げた方が良いです」

それに従っていると、少しではあるが気分が良くなった。

「……ありがとうございます……」

「いえいえ」

顔は見えないが、にこやかな声音の返事が返ってきた。

そしてそれから、どれ位飛んでいただろうか。

「到着しましたよ、レイ」

「……あい……」

私はどれだけ深呼吸を繰り返し、気を紛らわせようとしてももうどうにもならない程になっていた。

はの字が発音できないほどに。

カイラが手を引いて降ろしてくれた。

いつもなら恥ずかしくてできなかっただろうが、もうそんなことに思い至ることがない程に気分が悪かった。

やっと解放されたのは乗り始めてからずいぶんと経ち、もう陽が真上に昇った頃だったのだから。

私たちが降り立ったのは小さな町だった。

地方の町といった感じで、華やかではないが活気に溢れている。

“グラソール”、というらしい。ここでは花を意味する言葉だそうだ。

町の人々を見ると、フォレスト達を含めたこの世界の人々は本当に様々な格好をしているのがわかった。

もちろん私の世界のものとは異なるのだが、基本的なところは洋服のそれと変わらない。

ただ私からすると少し——いや結構コスプレのようにも見たの

だが、それは私の世界の常識だ。

基本的にもう私の常識は通じないと思っていくつもりでいる。

「うーん、とりあえず宿とる？」

「そうねえ。ベッドで休みたいし。レイも疲れたでしょ」

「えっ……いえ私は……」

フォレストとムクモを見て、この旅の主導権を握っているのはどうやらこの女性達であるようだと思った。

急ぐ旅ではない——というか目指すところがあまりに不確か——ということ、今日は宿だけとって、明日色々調達することになった。

女性陣と男性陣で二部屋。

宿自体も大きくなく部屋もそれほど広いわけではないのだが、小綺麗だった。

それに宿の主も快活な感じで好感の持てる人だ。

しばらく休んだ後、私は酔っていたのがなんとか治ってきた。そしてまだ夕食までは時間がある。暇な時間に女部屋ですることと言っのはやっぱり決まっ——

「私、レイのことが知りたいわ！」

「私も——」

ということだ。

第6話 Dragon（後書き）

女部屋ですることと言ったらおしゃべりしかないですよね…！

第7話 不平等

「レイの世界には竜はいなかったんだ？」

「はい」

「レイ、敬語に戻ってるわよ？」

「うっ……すみ……ごめん」

話し始めてから時間が経つのは早くて、シエラや私の世界についてを始めとし、もうずいぶん話した。

敬語も使わないようになった——否、半強制的に敬語禁止となった。

こんな風に女友達と話すという感覚は久しぶりだった。

二人の勢いに気圧されつつも、この空間が心地よく感じられる。最初に持っていた警戒心は、知らぬ間に消えていた。

二人の会話を聞きつつお腹が空いたな、と感じ始めていた時だ。

『ぎゅるる』

「……お腹すいたわね」

「そうだねえ」

「わああっ!？」

「そんな照れなくてもいいじゃない」

「そうそう。レイ気分悪くてお昼食べてないもんね」

「いや、あの、その……」

「そろそろご飯も出来る頃だから降りましようか」

「そうだね。行くようレイっ」

「はい……」

空腹時に食べた宿の食事は美味しかった。

ただ知らない食材がたくさんあって、不思議な味が多かったのは驚いた。

ここが異世界なんだと改めて感じさせられ、少しだけ寂しく思ったのは気のせいだろうか。

部屋に戻っていく時にカイラがそっと、苦笑混じりに言葉をかけた。

「あの二人は凄まじいでしょう？」

「あ……はい」

「でも良かった。レイ、さっきまでより表情が柔らかくなりましたよ」

「え？」

レイの返事を待つことなくじゃ、と言ってカイラは戻っていった。私の言葉遣いの変化に驚いていたようではあった。だがしかし表情が柔らかくなった、と。

俄には信じがたいが、カイラが言うからにはやはりそうなのだろうか。

周りに無愛想としか言われたことがないのに？

無表情のまま固まってしまったような顔であるのは自覚していた。何を言うわけでもなく他人から敬遠されてしまうのにも慣れている。

でもそれは、もう変えようが無いとも思っていた。
そんな私が？

その後も、自問自答を悶々と繰り返しながら眠りについた。

翌日。

「今日は買い出しね」

「うん、あと観光ね」

「観光って……」

呆れるというか何というか哑然とするしかないのだが、この人達の旅はこういうスタイルなのだろうか。

「じゃ、重たい物は君らに任せるよ男衆！」

自分たちはしつかり観光する気であるにも関わらず、この言いようである。

しかし男二人は嫌がる素振りを微塵も見せず、カイラに関しては笑ってさえいる。

「はいはい。レイもどうぞ楽しんできてくださいね」

「え……あ、ありがとうございます……」

ここではお礼を言えいいのか私も行きますと言うべきなのか。

「じゃ、よろしくね。私たちもしつかり買い物してくるわ」

その“買い物”は私物だろうなと思いつつも、私は力強い女性二人に付いて街へ繰り出した。

「んー、何処行こうね」

「とりあえず色々廻ってみましようよ。ね、レイ？」

「は……あ、うん」

歩いていくと、色々な種族を見た。

半分位は人間だが、二足歩行をしているトカゲのような者もいれば、人間に似た狼擬^{もと}きが歩いていたりもする。

人間と同じように買い物をしたり、会話をしていたりするのだ。中には半獣と呼ばれる者もいて、人間に獣の耳が生えていたりもした。

じろじろ見るのは失礼だと思いつつも、目で追ってしまふ。

「この世界にいる種族は大きく分けて人間、獣人、竜、あとは獣よ。中には人間と獣人の間で産まれた半獣^{ハニウ}って呼ばれている人もいるけどね」

私のその行動を見かねてか、フォレストが教えてくれた。

「……？ 人間と人では意味が違うんですか……？」

「よく解ったね。人間と獣人を総称して“人”って呼んでるんだよ。まあ二足歩行しているものを指してるかな」

今度はムクモが答えた。

なんとなく表現に違和感を感じたのだ。人という表現を使っているが“人”という言葉自体は種族の名前では無い。

「……そうなんですか……。面白いですね」

「あー、レイの世界には獣人や竜は居ないんだっけ」

「はい……」

「それはそれで見ていたいわ」

「あ、ねえあたしあそこ行きたい」

「じゃあ行きましょっか」

ムクモが指した店は服屋のようだった。

ガラス越しにたくさん可愛い服が見える。着てみたいな、と柄にもなく少しだけ思った。

「「レイの服を買いに」」

訂正。

やっぱりさっきのは気のせいだ。

第7話 不平等（後書き）

エルフは一応獣人の一種ですね！

第8話 お洒落はお好き？（前書き）

女二人に振り回される人々です。

第8話 お洒落は好き？

「な……っ、何で私の……？」

「え？ だって貴女元の世界の服のままじゃない」

確かに私は元の世界の、しかも制服のままだ。

ここでは色々な服装の人がいてそんなことはほとんど気にならないのだが。

「あの……でも私お金持ってません、から……」

「そんなのはあたしが払うわ」

「そんなことよりレイ、さっきから敬語よ」

「あ……」

この人達の重要視するところはなんだかズレている気がする。もちろんそれを口に出すことはしないが。

「これなんかどう？」

喜々としてムクモが差し出した服は、露出度の高く体のラインがくつきりと出てしまうようなものだった。

「ええと……」

選んで貰っているのは嬉しいが、さすがに言葉に詰まってしまっ

「ムクモ、レイにこれはキツすぎるんじゃないかしら？」

「そう？ おっかしいなあ」

さり気なく止めてくれたフォレストに感謝した。

どうやらムクモは自分が着ているような色気ある服が好みらしい。

「これなんかはどうかしら？」

「か、可愛い……」

「お、なんかレイっぱいね。着てみなよー」

私っぱいとは一体何なんだろうかと思いつつも、二人に促され試着室らしきところへ入る。

そして、慣れない服を試行錯誤しつつ着てみた。

「……えと……着てみました」

「！」

「あら」

何故かフォレストもムクモもひどく驚いた顔をしている。
やはり着方を間違えるか何かしたのだろうか。
知らなかったとはいえそれではあまりに恥ずかしい。
そんなことをぐるぐると考え始めてしまった時だ。

「レイ、あんた肌白いね！」

「……妬ましいくらいに綺麗な白さだわ」

「……そんなこと……ないです……っ！」

「いやあ、これまで隠れてたから気づかなかったけど綺麗だよ」

店員までもが「お綺麗ですよ！」などと言い出す次第だ。

そこまで言われると気恥ずかしさのあまり何も言えない。

ただどこれは、引きこもりの賜物とも言える。なんとも情けない
気持ちだ。

「よしじゃあそれ決定でいいね」

「そうね」

「あ、と、はー……」

「……まだ、買うんです……？」

「「当然。」」

「レイ、貴女も選びなさいな」
「はい……」

その後は、二人に差し出された服を試着しては脱ぎ、また試着しての繰り返しで、私自身が選ぶ必要はほとんど無かった。ただどその中でもやはり度々、露出の多い服をムクモが持つてきて、その度にフォレストがさり気なく回避させてくれた。

「買ったわね」

「うん。買ったね」

「じゃあ次だ次。どんどん行こう」

「……はい……」

まだ行くのか、と内心呆れてもいるが、自身のためでなく私のためにそのほとんどを費やしてもらっているのだ。

だからそれは、嬉しくもある。

しかし買い物をするごとに魔法空間へとぼいぼいしまい込んでいるので手荷物は無いが、買ったものはもうかなりの量ではないだろうか。

それに対して私はお金もなければそれを返す術もないのだ。いくらいいと言われてもやはり気になる。

——いくら遠慮したところで押され負けてしまうが。

その次に入ったのは小物屋だった。

たくさん可愛いものが置いてあって、中にはきらきらと光るアクセサリなどもあった。

そこではまた二人がそれぞれの好みの物を物色しつつ、私に合わせて選んでくれた。

そして、それが終わってからにはまたしばらく店を巡った。

一頻り廻ひとしきって二人が満足すると、今度こそ私物ではなくちゃんと

“旅の”必要品を買って宿に戻った。

その頃にはもう陽が傾きだしていた。

そして、宿には疲れた顔のカイラとムツキが待っていて、私たちの買ってきたものを見て、より一層顔に影が増した。

「楽しかったですか？」

「は、はい……」

「それは良かった。ぜひあの服を着てくださいね」

「へ？あ、服ですか……はい……」

まさかカイラからそんなことを言われるとは思わなかったので少し驚いた。

どの服を指しているのかはわからないが、読めない人だ。

「天然たらしか……？」

ぼそりとムツキが零した言葉は誰の耳にも届かず消えたのだった。

第8話 お洒落はお好き？（後書き）

カイラは紳士ですが天然たらしなところがあります。
天然故に本人は自覚無しですが。

ムツキだけは冷静に見てます。てか喋ってねええ！
たまにはムツキも喋らせてあげたいです。

第9話 行ってきます

今の私達の目的地は、大陸の中でも大きな王国“アーフォールド”。その王都である“ファリシア”で、情報収集をしようというのだ。

王都ともなれば、集まる人、そして情報の量も桁違いに多い。

「あそこは色々集まるからねえ」

「ええ。大きな国って言うのもあるし……あそこは情報の国だったわね」

「情報の、国……」

「他国からの出入りが多いんですよ。新しいものもどんどん集まります」

カイラが補足説明をする。

「なんだか女二人が話し出し、疑問を持ったレイにカイラが補足説明する、というのが基本形になりつつある。」

「ま、私らは行けないからよろしく頼むよー。レイ、ごめんね。王都はほんと色々あるから服選びしたかったんだけどなあ」

「……？」

「また服を買うつもりだったのか、というのは置いておいて。」

「……どうして、ですか……？」

「俺らは基本王族貴族とは会わない方が良いから」

「意外にも答えたのはムツキだった。」

「やはり不機嫌そうにぼそつと言うのだが、ここ数日でそれが普通なのだと知った。」

「しかし、何故王族や貴族を避ける必要があるのだろうか。」

「今度、レイにも話すね」

「は……い……？」

「まあ、昔色々あったのよ」とフォレストが耳打ちする。

「前に見つかつたことあるんだよね…変装してたのにな」

「魔力を探られたんだろ」

「うん、多分ね。あの時は面倒だった」

「……だからって追いかけてきた奴全員を気絶させ上……」

「ムツキ？ 余計なことはいわないよ」

「……」

一体何をしたんだろうか。

普段は口調こそとても崩したもののだが、もしかしたらこの人は意外と怖い人なのかもしれない。

とりあえず、ムクモとムツキは近くの村までで留まり、残りの三人がフアリシアで情報収集をすることらしい。

まあまだアーフォールド国内の端にいる状態で、フアリシアには遠いのだが。

私はこの世界やその事情についてはよく知らないからまかせるしかないが、どうしても一つ確かめたいことがあった。

「……あの……フォレスト……さん」

「どうしたの？」

「フアリシアに行くまでって……」

「ああ！ 大丈夫よー、もう竜には乗らないわ」

「……すみません」

「そんなことは気にしないでいいのよ。それにもう少し大きな町まで行けば移動門が使えるわよ」

移動門とは、大きな街などには大抵置かれているもので、特殊な魔力がこめられている。

そして、魔法使いや魔女などの魔力を使える者の力を借りて、そ

の門から門へと自由に移動できるものらしい。

しかしその魔力を使える者の力の大きさによって移動できる距離は変わってくるそうだ。

その点ムクモの力は強く、ほとんど何処へでも行けると言っている。

「それよりも、レイ……」

「……はい？」

「服の裾なんて持ちちゃってかわいいわ！」

「ふえいつ…すみせんっ……」

「ふえいつて！ ああもう……可愛い」

そう言いながらフォレストはぎゅうぎゅうと抱きしめてきた。フォレストの方がよっぽど可愛いと思うのだが。

「あたしもー」

そう言つてムクモまで抱きついてきた。

なんとも恥ずかしいことをしてしまった上、こんな美女達に抱きつかれることなどついぞ無かったので、おろおろしてしまう。

「俺もいいですか」

「いいんじゃないーい」

「アホか」

流石にカイラにまで抱きつかれるのは困る気がするので、ムツキには感謝した。

それから数日、前のように野宿とは違うが野宿のような――をしつついくつかの村を通り過ぎ、大きな街まで来た。

最初に行った町、グラソールは活気のある町だったが、ここはまた違った雰囲気だ。

私の勝手なイメージでいくとフランスのパリといった感じかもしれない。

今までよりも綺麗に着飾った人が多く、華やかさが漂っている。

まあこんな街も、ムクモとムツキはあまり通りたくないようだが。

しばらく歩いていくと、移動門らしきものが見えてきた。

「わ……」

とにかく大きい。そしてとても頑丈そうだ。

「大きな魔力にも耐えられるようになってるんですよ」

「そう……なんですか……」

「じゃああたしたちはここで一旦お別れだね。まあ近くまで行くけど、移動門は無いからさ」

「そうね。気をつけてちょうだい」

「そっちもねー」

「ええ。じゃあそろそろ行きましょうか」

門に向かって歩き出す。

王都とどんな場所なのだろうか。

「じゃ、送るよ。行つてらっしゃい」

そして、私に向いて微笑んでくれた。

ムツキは無言でこちらを見つめている。

「……行つてきます」

「ふふっ。行つてきまーす」

「……ふっ。行つてきます」

三人がみんなして笑った。私は変なことを言ったのだろうか。不思議に思っていると、ムツキまでほんの少し笑っていた。

そしてムクモが何か唱え、私たちは白い光に包まれた――

光の中で、誰かの声を聞いた気がする。

それがどんなものだったか、思い出すことはできなかつたけれど。

『おやおや、ずいぶんと変わった子が紛れ込んだものだ。しかも

——』

忘れられたその声は、そんなことを呟いていた。

第9話 行ってきます（後書き）

なんで笑われたかって？

それはレイが行ってきますと言ったからです。

それは帰る場所があるってこと。

第10話 ファー（前書き）

三人で王都にやってきました。

第10話　ファイ

光が消えていき最初に目にしたのは、厳つい顔をした門番のような人たちだった。

衛兵らしき人が二人、軍服を思わせる服装で、槍を構えて立っている。

どちらも、普段から鍛え上げられているであろうことが容易に伺えるしつかりとした体つきをしている。

私達の姿を見留、その一人が口を開いた。

「通行証を」

通行証とは何だろうか。

するとカイラは無言で、カードのようにも見える小さな金属板らしきものを取り出し、示した。

「……！　どうぞお通りください」

それを見たたん、衛兵は何故か驚き表情を引き締めた。

「ありがとうございます。行きましょう」

しかしカイラはそれを気にする様子もなく先へ進んだ。
見るとフォレストも涼しい顔だ。

——一体何なのだろうか。

「どうかしたの？」

それが表情に表れていたのかフォレストが訊いてきたが、触れてはいけない気がして答えることはできなかった。

流石は王都ということだろうか。

表の通りにはたくさんの方が行き交い、華やかだ。そしてたくさん
の種族がいる。

もう何度か人間以外を見てきたが、それでもやはり獣人には慣れない。

服を着た動物が二足歩行をしているのだ。しかも人間と同じ言葉を話す。

ここではそれが普通なのだろうし、そんなことを思うのは失礼なのかもしれないがやはり私は異世界の人間なのだ。

そんなことをぼうつと考えていると、立ち止まったカイラの背中にぶつかった。

「ぶっ」

「あぁっ、すみません。大丈夫ですか？」

「ごめんなさい……。大丈夫、です」

知らぬ間に大通りから抜けていたらしい。少し遠くに人混みが見えている。

ぶつけた鼻をさすりながら前を見ると、そこには大きなお屋敷があった。

「……わ……」

「大きいわねえ。流石貴族」

とにかく大きい。そして煌びやかだ。

お城かと思紛うほどのもので、いかにも“金持ちの家”といった雰囲気である。

今立っている門から建物まではかなりの距離があり、広大な敷地内には綺麗な庭が広がっている。

ぴらぴらのドレスを着たお嬢様が駆けだしてきそうでさえある。

こんな所に何の用があるのだろうか。

「本当、無駄に大きいですね。大きいだけで中身がないのはこの主とそっくりだ」

「そりゃあんまりだー！」

「っ！」

突然頭上から声が降ってきた。

あまりに驚いて声にならない悲鳴を上げてしまった。

「吃驚したわ。レイ、大丈夫？」

「大丈夫……です」

「レイを怖がらせないでください、フィー」

カイラがそう言っていると、一人の男が突如カイラの前に降り立った。

「その子レイって言うんだ。へえ」

何故かこちらに興味を持ったその男は、とにかく大きい。

カイラも結構大きな部類に入ると思うのだが、このフィーと呼ばれた男は更に大きい。

細身だが身長は2メートル近くあるのでは、と思うほどだ。

髪は燃えるようなオレンジ色で、ウルフカットのように見える。

瞳は翡翠色だ。肌は小麦色で健康そうである。

服は上等そうなものを着崩している。貴族なのだろうか。

この男はさつきから何故か私のことをじっと見ている。

身長があるからか、少し怖い。しかもさつきから徐々に近づいてきているのだが。

「う……」

「だからレイを怖がらせないでと言っているでしょうが。バカフィアマ」

そう言っただけカイラはそのオレンジ色の頭を引っぱりたい。

「っで」

「でかいのが寄ってくから怖がってるでしょうが。しかもじろじろ見るなんて不躰ですよ。

大丈夫ですか？ レイ」

普段とはかけ離れて、“フィー”という男に対するカイラの口調は荒く、声音も違う。

それにさつきからカイラの目は据わりっぱなしだ。

「えっ、あっ、大丈夫……、です」

「あー、そっか。やっぱ俺は威圧感があるのね……。ごめんね？」

えーっと、レイ」

「……いえ」

「うん。あとお久しぶり。フォレスト」

「ええ。久しぶりね、フィアマ」

「言ってた通りしばらく俺たちはこっちにいることになりましたので」

「あーはいはい。どこでも自由に使ってくれ」

会話から察するにこの主である貴族はこのフィアマらしい。

年齢も20歳前後のように若く見える上、私の想像していた貴族とはかけ離れているのだが、この世界ではこんなものなのだろうか？ と失礼なことを考えてしまった。

第10話　ファイ（後書き）

カイラは結構猫かぶりです。

フィアマは貴族。カイラはファイと呼んでいますね。
どういう関係だ、っていうのはそのうちに。

第11話 情報

「ここがフォレスタ、んでこの隣がレイの部屋。カイラはいつものとこ使って」

フィアマに案内された部屋はやたらときらきらしていた。しかも大きい。

赤や金といった派手な色を多用していて——正直に言ってしまうば、悪趣味な部類だ。

「相変わらず悪趣味ですね。レイがドン引きですよ」

「うーん。どうしてこの素晴らしさが解らないのかなカイラは。ねえレイ？」

「どうでしょうか……」

残念ながら解らない。はいともいいえとも答えることができずに曖昧な返事をするしかなかった。

「解りません。レイも無理しなくて良いんですよ。解ったらこいつと同列になってしまう」

「ひどいなあ。せつかく久しぶりにあ会えたのに」

そう言ってフィアマは小動物のような眼でカイラを見つめた。

「気色悪いです。でかい図体してその眼はやめてください」
まったくもってその通りである。

「快く部屋を貸した幼馴染みにそれなの？」

フィアマが言った。

え、幼馴染み？

「そう。この二人は子供の頃一緒に住んでたのよ？」

驚きが顔に出ていたのだろうか、フォレスタが言った。

「……そう、なんですか」

一緒に、ね。しかしそれならこの状況にも、カイラの態度がやた

らに悪いことにも納得ができる。

「フォレスト、変な言い方をしないでください」

「あら、間違ったことは言っていないわよ」

カイラは心底嫌そうな顔をしているのだが、フォレストはとても楽しそうだ。

カイラが言うに、彼は昔ここに、何年か預けられていたそうだ。

だから親しく、王都に立ち寄る際は利用させて貰ってるとかなんとか。

そこでふと思ったのだが、貴族に預けられるということは、つまりカイラもそれなりの身分の人間ということになるのではないか。

そう考えてカイラを見るが、私にはとても訊けない。

カイラが言わないのであれば知るべきではないのだろう。それに、私は他人なのだから。

その日は屋敷の中を案内して貰ったりした。

そして夕食はやはり豪華過ぎるほどに豪華でカイラが嫌そうな顔をしていたが、フィアマの食欲は素晴らしかった。

そして三人のマナーの良さに自分が少し恥ずかしくなったのは秘密だ。

翌朝、また朝から胃もたれしそうな料理達を少しだけ食べ、街へ情報収集に出ることになった。

「二手に分かれて聞き込みに行きましょう。レイはフォレストに付いて行ってくださいね」

「……はい」

「あと変な人に絡まれないように。絶対に裏路地なんかには入らないでください。特にレイは」

「……？ 危ないですか？」

「そう、ですね。危ないです」

どうもそれだけではないように感じるのだが、よくわからない。

この世界の“危険”がどんなものなのかは想像が付かないが、言うことは聞くべきだろうと思い頷く。

「まあ私がいるから問題無いけどね」

「それはそうですね」

フォレストはそう言った。

しかしいくらこの世界の人だといっても、彼女もか弱い女性にしか見えないのだが違うのだろうか？

私にはいまいちわからない自信である。

たしかに強かではあるのだが、彼女がそこまでの攻撃力を有しているとは思えない。

「それじゃ行きましょう？ レイ」

「は、はいっ」

雑多な人種が行き交う大通り。

私達は城周辺の繁華街で聞き込みをすることになっている。

——と言っても、どんどん話を訊いていくフォレストに私がくつついているだけなのだが。

全く役に立たない自分が情けないが、訊くための技術もなければ

話を聴けたところで理解ができないという悲しい現実がある。

そんな私を他所にフォレストは今も見知らぬおじさんの話を聞いている。

この国で島の話は有名らしく、ただの伝説でも無いらしい。

だからカイラ達もそこを目指しているわけだが、それは即ちそんな輩が他にも大勢いるということだ。

実際に願いを叶えた人が居るといふ話も聞く。そしてそんな噂を集めているのだ。

全てが本当ではないがしかし、噂はどこかに真実を隠しているものだから。

実に上手く言葉を繰り出すフォレストに感心しながら、私はひたすらぼーっと立っていた。

通り過ぎていく人々の足下を見つめて、人が多いな、と呑気に考えながら。

しばらく経って、

「そうですか、ありがとう」

フォレストはくるりと後ろを振り返った。

「……………レイ？」

しかし話を聴き終えたフォレストが、私の姿を捉えることは無かった。

第11話 情報（後書き）

お久しぶりでございます。

新生活が始まってなかなか更新する余裕がありませんでした。申し訳ない。

さてさて、カイラは一体何者なのでしょうかね。
そして玲は一体何処へ行ったんでしょうか。

第12話 誘拐（前書き）

汚い文章な上鈍足で、申し訳ないです。
それでも読んでくれている方々には本当に感謝。

第12話 誘拐

「……へ……？」

ここは、何処だろうか。

あまりに多い人々を呑気に見つめている内に、いつの間にか裏路地へと流されてしまったていらしい。

随分と動いてしまったようで、自分がどこにいるのか全く解らない。

「どうしょ……」

路地裏は昼間にも関わらず薄暗く、どこか湿っていて黴臭い。

辺りを見回すが人気は無く、ただ背の高い建物が並んでいるだけだ。

あれほどカイラに注意されていたにも関わらず、早々に破ってしまった自分が恨めしい。

そしてフォレストも、突然居なくなった私を怒っているに違いない。

もしかしたらこれを好機と見て捨てられるのだろうか。

そうなればそれも仕方無いかもしれないな、とも思っけれど。

この世界には魔術がある代わりに、電話も無ければ当然メールも無い。更に言うとな私は並外れた方向音痴である。

こんな状況でどうすればフォレストの元へ帰り着けるだろうか。

しかしいつまでもこんなところに突っ立っていても仕方が無いと思ひ、とりあえず表の通りへ出ることにした。

しかし足を踏み出したその時。

ぼん、と肩を叩かれた。

さっきまで人は居なかったはずの背後から、だ。

ぞくり、と背筋が寒くなった。

恐々と後ろを見てみると、そこには数人の男が居た。

嫌な目つきで、にやにやと私を見下ろしている。

「……………！？」

いかにも、といった風な鍛えられた（むっきむきの）体で、しかしその瞳はどこか濁っているように思う。

肩を叩いたけれど声を掛けてくるわけでもない。ただ、品定めするような眼をこちらに向けて。

肩に置かれた手は離されることなく私の肩を掴んでいる。

じわりじわりと、その手には力が籠もってくる。

かなりの痛みに私は顔を顰めた。

これは、まずい。

そう思い手を振り払って走り出したが、日々運動不足である私が逃げられるわけはなく、あっさりと掴まってしまった。

「お嬢ちゃん、逃げられねえぜ」

そんな声が聞こえると声を上げる間もなく首筋にすんと、と衝撃を感じ、視界が暗転する。

「っ……………」

「まあそれなりには売れるだろう」

とてもとても不吉な声を聞いたと同時に、私は意識を失った。

（一体何処へ行っちゃったの！）

その頃、フォレストは玲を探しあちこちを走り回っていた。

どんつ、と見知らぬ人にぶつかったのにも気付かず、フォレストは奔走する。

しかしあまりに多い人の中、たった一人の少女を見つけるのはとても難しい。

カイラやムクモ達ならすぐに見つけることができたかもしれないが、フォレストは魔術を使うことができないのだ。

玲は異世界から来たばかりな上、自分たちとは違い何の力も持っていない。

もしも彼女に何かあつたら、と不安は募るばかり。

玲は出会ってから数日経つた今でも、驚くほどに大人しい。

人と関わることをあまりに怖れている。否、諦めきっているようにさえ見える。

そもそもこちらに來た時の状況が状況であるから、何かはあると思っっているが。

しかしそんな大人しい玲であるからこそ勝手に何処かへ行ってしまうなんてことはまずありえないだろう。

にも関わらず、玲は消えてしまった。

小さな子供ではないのだから、と思われてしまいそうだが、王都は怖ろしいところなのだ。

表は華やかであるが、光が強い分その影は濃い。

裏では違法な商売やとてもじゃないが口にできないようなことまで行われている。そしてて人身売買も日常茶飯事なのだという。

もし玲がうつかり変なところに迷い込んでしまったりなどしたら、それこそ格好の餌食だ。

一人で人通りの少ない所に行けば、“そういう”輩の目にもつきやすい。そして若い人間はよく売れるとも聞く。

掴まってしまえば最後、どんな目に遭うかは想像もしたくない。

（せめてカイラが気付けば……っ）

多少は魔法が使えるカイラであれば、と思うフォレストだが、そのカイラと連絡をとることは叶わない。

連絡手段がまともに無いのは困ったことだ、とフォレストは思った。

全く同じ頃、玲もそんなことを考えていたのだが、二人がそれを知ることは無かった。

第12話 誘拐（後書き）

電話もメールもできないとなると、すごく不便ですね。

第13話 子供（前書き）

非常にお久しぶりな更新です。ずっと行き詰まっ
てて申し訳ありませんでした。

第13話 子供

「……っ？」

私が目を覚ましたそこは、どうやら牢屋のようなものだった。先程自分の身に起こったことを思い出し、私は身震いした。

じつとりとした嫌な湿気が肌にまとわり付き、あの裏路地よりも濃い黴の臭いが鼻をつく。

そして周りには私以外にも数人居るようだが、しかし何か違う。

「あつ、起きたよ！」

「ほんとだーっ」

「大丈夫？」

「いきてるー？」

「当たり前でしょ」

特有の喋り方にまだ甲高い声、そして目の前に並ぶ少し高さの足らない頭達。

そう、その“人々”は——皆子供だった。

「え……」

思わず声が出る。どういう状況だろうかこれは。

「あ、喋った」

「ねえねえ大丈夫？」

「なんでここに来たの？」

「どっから来たの？」

「ち、ちよっと待って……！」

子供そしておばさま方特有のマシングントークである。

子供ながらに心配してくれてるのはわかるのだが、これは困る。
ひたすらあたふたするしかない私であつたが

「ちよつとみんな静かにして」

子供達の中からそんな声が聞こえて、質問攻めが収まった。

見ると子供達の中心から年長者なのであろうか、12歳程の少女が出てきた。

実に不思議そう、というか怪訝そうな顔で首を傾げこちらを見ている。

そしてうーん、と言いながらこう問うた。

「お姉さん、もしかして状況わかってなかったりする？」
状況、ね。

カイラにあれほど注意されていたにも関わらず、自身が誘拐されたとこの状況は充分理解しているつもりだが。

「……誘拐されました」

「ああー……やっぱりね」

実に呆れた顔をされた。やっぱりとは何だ。

わかつている精一杯の事実、状況を言つたつもりだったのだが。

こんな年下の子にこんな風にされると少し哀しくも思うが、そもそもこの国どころかこの世界の住人ですらない自分に正しい状況などわかるわけがなかった。

「私達が誘拐された目的はね、“子供好き”の貴族様に売られるためなんだ」

「……子供好き？」

「そう“子供好き”」

とても意味深い言葉を彼女は言う。

「それって連れて行かれたらどういうことに……？」

「……聞きたい？」

私はふるふると首を横に振った。そんな嫌そうな顔をされたら聞きたくない。というよりもなんとなく予想が付いてしまった。

つまり、私が思うにその貴族達は所謂“ロリコン・シヨタコン”と言われる人種なのだろう。

だからわざわざ街から攫ってきた子供達を買ったのだ。背筋の寒くなる話だが、世の中には色々な人間が居る。

しかしそれを理解すると同時に一つの疑問が浮かび上がった。

「……私は、子供に入りますか……？」

大人でないのは確かかもしれないが、子供と言われる程自分は幼かっただろうか。

「……お姉さんいくつ？」

「今年で１７です」

「え……」

ああその顔、は。

「えーっと、ほんとに？」

「ほ、本当ですよ……っ！」

つまり私は子供だと間違え攫われたわけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0066g/>

ネガイゴト一つ

2010年11月18日09時56分発行